

R.インガルデン関連主要参考文献（日本語）

* 欧文の関連文献については、ロマン・インガルデン・デジタルアーカイヴ <http://ingarden.archive.uj.edu.pl/en/dziela/> 参照。

【書籍】

ロマン・インガルデン『文学的芸術作品』瀧内慎雄・細井雄介訳、勁草書房、1982年、新装版1998年

ロマン・インガルデン「「エドムント・フッサールの思い出」および書簡への注釈」『フッサール書簡集1915-1938 フッサールからインガルデンへ』桑野耕三、佐藤真理人訳、せりか書房、1982年、pp.157-276

ロマン・インガルデン『人間論 時間・責任・価値』武井勇四郎・赤松常弘訳、法政大学出版局・叢書ユニベルシタス、1983年

ロマン・インガルデン『音楽作品とその同一性の問題』安川^暁訳、関西大学出版部、2000年

【定期刊行物】

ロマン・インガルデン著、武井勇四郎、西澤孝訳『文芸作品論--存在論,言語論,文学の哲学,その境界領域の研究』(1960年,ポーランド語版)(1)『岐阜経済大学論集』2004年3月1日、第37巻3号、pp.139-177

ロマン・インガルデン著、武井勇四郎、西澤孝訳『文芸作品論--存在論,言語論,文学の哲学,その境界領域の研究』(1960年,ポーランド語版)(2)『岐阜経済大学論集』2005年2月1日、第38巻2号、pp.177-215

ロマン・インガルデン著、武井勇四郎、西澤孝訳『文芸作品論--存在論,言語論,文学の哲学,その境界領域の研究』(1960年,ポーランド語版)(3)『岐阜経済大学論集』2005年12月1日、第39巻1号、pp.141-193

ロマン・インガルデン著、武井勇四郎、西澤孝訳『文芸作品論--存在論,言語論,文学の哲学,その境界領域の研究』(1960年,ポーランド語版)(4)『岐阜経済大学論集』2006年10月1日、第40巻1号、pp.132-178

石淵聡「同じ舞踊作品をもう一度見ることにについて」『舞踏學』2009年第32号 pp.1-11

岩切啓人「質料と作品の関係 ―インガルデン的存在論からの貢献」第 68 回美学会全国大会若手研究者フォーラム発表要旨 國學院大學 2017 年 10 月 9 日

植村玄輝「フッサールのノエマとインガルデンの純粹志向的对象 志向性理論から世界の存在をめぐる論争へ」『フッサール研究』第 7 号 2009 年 3 月 pp.4-14

大石昌史「生起する作品：芸術作品の遊戯的世界開示性について(美学会第四十五回全国大会報告)」『美学』1994 年 45 巻 3 号 p. 62-

大石昌史「芸術経験における<自己=意味=像>としての象徴の生成」『美学』2009 年 60 巻 1 号 pp. 16-29

太田明子「R・インガルデンの芸術論 ―作品の体験の存在論的考察」『京都大学研究紀要』京都大学文学部美学美術史学研究室、1989 年 3 月、10 号、pp. 129-150

岡部玲子、三宅光一「インガルデンの音楽論」『常磐短期大学研究紀要』2000 年 12 月、第 29 号、pp. 61-72

金田晋「ロマン・インガルデンの文学理論の成立事情とその意義」『地域文化研究』1976 年 1 月 1 日、2 号、pp.229-249

川上明孝「ローマン・インガルデンの文学理論：擬-判断文をめぐって(美学会第三十三回全国大会報告)」『美学』1982 年、第 33 巻 3 号、p. 50

川上明孝「ロマン・インガルデンの画像理論」『金沢美術工芸大学紀要』1986 年 3 月 25 日、第 30 巻、pp.23 - 28

川上明孝「文学作品の真：インガルデンの擬似判断説をめぐって」『美学』1991 年 41 巻 4 号 pp. 22-33

桑原謙之「「是は何か？」の現象學的考察 インガルデンの本質問題の爲に」『龍南』1931 年 6 月、218 号、pp.1-23

鈴木修一「読書の現象学への序説--R.インガルデン「文芸作品」における<呈示された対象像の無規定箇所>を手懸りにして」『人文研究』1985 年 1 月、93 号、pp.95-128

瀧内槇雄「語義について覚え書き：ローマン・インガルデンの見解」『文藝言語研究. 文藝篇』筑波大学文藝・言語学系研究紀要、1981年3月、5巻、pp. 83 - 92

武井勇四郎「ロマン・インガルデン(1893.2.5--1970.6.14)哲学について-1-〔含 主要著作年譜(1919-1977)〕『岐阜経済大学論集』1978年9月、第12巻3号、pp. 141-160

武井勇四郎「ロマン・インガルデン(1893,2,5-1970,6,14)哲学について-2」『岐阜経済大学論集』1979年6月、第13巻1-2号、pp. 221-269

武井勇四郎「ロマン・インガルデン(1893,2,5-1970,6,14)哲学について-3a」『岐阜経済大学論集』1979年12月、第13巻4号、pp.121-142

武井勇四郎「ロマン・インガルデン(1893,2,5-1970,6,14)哲学について-3a」『岐阜経済大学論集』1980年3月、第14巻1号、pp. 305-329

武井勇四郎「インガルデンにおける文芸作品の構造とその具象化」『岐阜経済大学論集』1981年3月、第15巻1号、pp. 25-41

武井勇四郎「インガルデン美学における文芸作品の「命脈」と人間の生-1」『岐阜経済大学論集』1982年12月、第16巻4号、pp.149-169

武井勇四郎「インガルデン美学における文芸作品の「命脈」と人間の生-2」『岐阜経済大学論集』1983年3月、第17巻1号、pp.67-96

武田庄三郎「『叙事的文学』と『抒情詩』とをめぐる論争--R・インガルデンとK・ハンプルガーとのこと」『富山大学教養部紀要』1973年3月、5号、pp. 57-77

田中幸子「N.ハルトマンからインガルデンへ--芸術存在論における一展開」『美学』1982年6月、第33巻1号、pp.15-25

西澤孝「ロマン・インガルデンの「文芸作品論」について-1」『岐阜経済大学論集』1979年6月1日、第13号1-2号、pp.203-220

西澤孝「ロマン・インガルデンの「文芸作品論」について-2」『岐阜経済大学論集』1979年12月1日、第13号4号、pp.267-303

西澤孝「ロマン・インガルデンの「文芸作品論」について-3」『岐阜経済大学論集』1984年10月1日、第18巻3-4号、pp.143-163

西村清和「読書とイメージ」『美学』1999年49巻4号 pp.1-12

新田博衛「詩の言葉(二)」『美学』1971年22巻1号 pp.41-52

野家啓一「不在のものの可視化：物語り行為をめぐって(<特集>日本文学協会第63回大会(第一日目)文学教育の転回と希望-<文脈>を掘り起こして-)」『日本文学』2009年58巻3号 pp.24-33

柳澤広美「主客混交する芸術作品——インガルデンによる「純粹志向的对象」論の普遍性——」『第70回美学会全国大会 若手研究者フォーラム発表報告集』2020年3月 pp.5-13

三村尚彦「個別的本質とイデ---ヘリング,インガルデンにおけるフッサール本質論の批判について」『現象学年報』1996年1月11号、pp.227-223

三村尚彦「ゲッチンゲン学派のフッサール本質論の批判について--ヘリング,インガルデンの本質論を中心に」『関西大学哲学』1995年3月、第16号、pp.37-58

武藤三千夫「美的価値について：R・インガルデンの所論に拠りつつ(美学会第三十八回全国大会報告)」『美学』1987年第38巻3号 p.50

毛利三彌「演劇の物語論覚え書—戯曲と上演—」『演劇学論集 日本演劇学会紀要』2010年50巻 pp.19-38

柳澤広美「主客混交する芸術作品——インガルデンによる「純粹志向的对象」論の普遍性——」『第70回美学会全国大会 若手研究者フォーラム発表報告集』(電子ジャーナル)2019年度、2020年3月31日、pp.5-13

山崎蓼子「インガルデン「文芸作品の認識について」(Roman Ingarden; Vom Erkennen des literarischen Kunstwerks, 1968)」『美学』1970年9月、第21巻2号、pp.60-68

Arkadiusz Chrudzinski (著) 植村玄輝 (訳)「現象学的な意味の理論--ブレンターノからインガルデンまで」『現代思想』2009年12月号第37巻16号、pp.66-88

Wolfgang Ruttkowski 「ロマン・インガルデンとニコライ・ハルトマンの層体系における主要差異〔英文〕」『京都産業大学論集』1990年6月、第17号、pp. 64-82

【書評】

杉山康彦「書評・展望 R・インガルデン著／瀧内・細井訳『文学的芸術作品』『日本文学』1984年、33巻10号、pp. 58-60

T.Negishi「新刊紹介（ヤン・パトチュカ「ローマン・インガルデンの絵画作品存在論について」）」『美学』1973年、第24巻2号、pp. 72-73